

## [083\_03] 法政研究表紙奥付

<https://hdl.handle.net/2324/1790473>

---

出版情報：法政研究. 83 (3), 2016-12-15. 九州大学法政学会  
バージョン：  
権利関係：



## 九州大学教授 直江眞一 先生

直江眞一教授は、一九五二年一月に東京都で生まれ、一九七六年東北大学法学部卒業後、同大学院法学研究科修士課程に進学された。イングランド法制史の草分けである小山貞夫教授、ドイツ法制史の権威世良晃志郎教授、日本法制史の服藤弘司教授、イングランド中世史の佐藤伊久男教授の指導の下、研究者としての道を歩まれることになった。法制史研究にとって極めて恵まれた環境のなかで修士課程を修了され、一九七八年には東北大学法学部助手に採用されている。その後、同大学教養部講師 助教授を経て、九州大学には一九九三年四月に助教授として着任された。一九九五年六月には教授に昇任されている。

直江先生の主たる研究領域は、西洋法制史、特にイングランド中世法制史である。この分野において、先生は、大きく分けて次の二つの課題に取り組んでこられた。まず、一二、一三世紀イングランドにおけるコモン・ローの成立史の解明である。[*Assize of novel disseisin* 成立史再考]などにみられるように、コモン・ローの成立を、当時の学識法(中世ローマ法および教会法)の展開の中で新たに位置付けられた。もう一つは、一五世紀イングランドの法律家ジョン・フォートレスキューの思想分析であり、その成果は「イングランド法の礼賛について」や『自然法論』の翻訳として結実している。こうした先生のご研究の特色は、写本研究を踏まえながら、史料と理論を対話させるという手法にある。法学のみならず、歴史学の分野からも高い評価を得ている理由の一つであろう。なお、先生の史料論への関心は、森本芳樹教授(九大・西洋経済史)との交流を通じて深められたものでもある。

また、教育は、先生にとって、研究と並ぶ車の両輪である。学部における西洋法制史の講義では、一二世紀ルネッサンス、コモン・ローとシビル・ローの分岐などを熱を込めて語られた。西洋法制史演習も人気の授業であり、毎年発行されているゼミ論文集は、学生の意欲作で溢れている。その温和なお人柄から学生達にも慕われ、ゼミ合宿では、学生とともにご趣味の山登りに興じられた。さらに、学部の外国法律書講読と大学院の授業では、ラテン語のテキストを輪読され、法学教育におけるラテン語の重要性を説き続けられた。法科大学院では、歴史と法Iを担当されるなど、法曹の養成にも余念がなかった。

大学の管理運営に目を転じて、先生の功績は計り知れない。学務委員長、総長補佐、評議員、副研究院長などを経て、二〇〇六年四月から二〇〇九年三月まで、大学院法学研究院長・法学府長・法学部長を二期三年務められた。この間、大学院法学府の五専攻制を一専攻制にする再編改組などに取り組まれた。また、大学間協定の締結を含め、中国とタイなどとの国際交流の維持発展にも多大な貢献をされている。

この度、直江先生が定年退職を迎えられるにあたり、長年のご功労に心より感謝申し上げますとともに、先生のますますのご健勝とご活躍を祈念して、ここに本号を献呈する次第である。